

知能とは

知能（Wechsler）：特定の能力ではなく、各個人が目的的に行動し、合理的に行動し、自分の環境を能率的に処理する総合的な能力。すなわち知能はパーソナリティ全体としての機能であり、認知能力の概念に含まれる諸要因以外の不安、忍耐力、動機、目的意識など人格と区政にも影響された問題解決の総体的能力

＝「知的能力（Intellectual ability）は知能（intelligence）の一側面」にしかすぎない

→ 非知的要因の影響を受けるが、日常生活および、外界への適応、検査成績と関連

→ 子どもの生活史、背景を重視。また、検査中の子どもの行動観察が重要となる

知能の構造

Spearman(1904) 二因子説

一般因子（G） 知的活動に共通して作用する

特殊因子（S） 各領域に別個に作用する特殊因子

Thurstone(1941,1947) 群因子説

数（N）、知覚（P）、空間（S）、言語（V）、記憶（M）、
帰納的推理（I）、演繹的推理（D）

の7因子の組み合わせによって知的活動が実行される

Guilford(1959) 知能構造の因子モデル

知的操作（評価、収束的思考、発散的思考、記憶、認知）

その対象となる種類（図形的、記号的、意味的、行動的）

ある内容について操作した結果・所産（知識の単位、クラス、関係、体系、変換、合意）

の3次元の組み合わせから120個の因子行動を過程

知能の測定の意義

1、知的発達指標の明示

2、認知的構造理解の役割 → IEP（個別教育プログラム）

＝学力的なつまづきや習得の困難と認知的特性の関連を探るもの

知能検査

1905 Binet が開発

1916 Terman スタンフォード・ビネー式知能検査 IQの考案

1974 Wechsler 群因子論の流れをくんだ知能検査開発

ビネー系・ウェクスラー系 → 総合的な知的水準を測定



知的活動の中でも特定の領域に限定して発達水準を測定

言語領域 ITPA 言語学習能力診断検査

動作性 Goodenough 人物画知能検査 など

知能検査の評定

知能指数 IQ : intelligence quotient

$$\text{IQ} = \frac{\text{精神年齢 (MA)}}{\text{生活年齢 (CA)}} \times 100$$

知能偏差値 (Standard score:SS) 同じ集団の中で相対的にいかなる位置にあるかを表示
10(個人の得点-同年齢集団の平均得点)

$$\text{SS} = \frac{\text{個人の得点} - \text{同年齢集団の平均得点}}{\text{標準偏差}} + 50$$

ウェクスラー系の知能検査は、ほぼ同一の年齢集団の平均値にあるものを知能指数 100
として、標準偏差を 15 として IQ を算出

知能をとらえる上での留意点

1、知能指数は恒常的であるのか

知能検査の開発上は、年齢とともに変化しないことが期待されている

発達障害など発達のアンバランスさを有している児の場合

検査に対する構え、検査者の意図の理解など対応関係の改善 IQ 上昇

抽象的な能力への移行段階での躓き、不安定さ IQ 下降

2、検査者の熟練度の影響

検査への構えを引き出し、その子自身の最大限の能力を引き出すためには

検査者が検査の手順、検査項目が意図するものなどに熟達することが必要

特に、低年齢や発達障害児の場合、検査者の熟練度によって試行可否が異なる

3、知能レベルの判定

知能とは何かという命題が明確でないまま(統一見解がないまま)に、知能検査が
実用優先で開発され、利用されてきた経緯。

結果をどう利用するか、読み取るのかについて、必要以上に重みづけを与えない

表 6-2 知能の定義

ピアジェ (Piaget, T.)	・生体の環境に対する活動と環境の生体に対する活動を均衡させる能力
スピアマン (Spearman, C.)	・ものごとの関係を認識する能力
シュテルン (Stern, W.)	・生活の新しい課題や条件に対する一般的精神的順応力
フリーマン (Freeman, F. N.)	・知能検査で測られたもの
ウェクスラー (Wechsler, D.)	・目的的に行動し、合理的に思考し、環境を効果的に処理するための、 個人の集合的ないし総体的能力
アメリカ心理学会	・学習する能力、学習によって得た知識や技能を新しい場面で利用する 能力であり、その得た知識により選択的適応をすること

表 6-3 個別式知能検査の概略

名称	目的	対象年齢	所要時間	検査結果	実施される対象の例
田中ビネー	知能水準の測定/MRの鑑別	1歳~成人	30~60分	IQ, 精神年齢	MR/児童
鈴木ビネー	知能水準の測定/MRの鑑別	2歳~成人	25~90分(年齢による)	IQ, 知能年齢	MR/老人
WPPSI	知能構造の検討	3歳10か月~7歳1か月	50~75分	IQ(全体/言語性/動作性)	超未熟児のフォロー
WISC-III	知能構造の検討	5歳~16歳11か月	60~70分	IQ(全体/言語性/動作性)	ADHD/LD/広汎性発達障害
WAIS-R	知能構造の検討	16歳~74歳11か月	60~90分	IQ(全体/言語性/動作性)	成人の精神障害
K-ABC	認知処理過程と習得度の測定	2歳6か月~12歳11か月	30~60分	継次処理, 同時処理, 認知処理, 過程習得度	CD, MR
ITPA	情報伝達と処理機能の測定	2歳6か月~9歳11か月	90分以上	PLA(言語学習年齢)	言語性LD
WMS-R	記憶力の多面的評価	16歳~74歳11か月	45~60分	全般的記憶, 言語性記憶, 注意集中, 視覚性記憶, 遅延再生	記憶障害/痴呆

『臨床心理アセスメント演習』松原達哉・楡木満生 共編、培風館(2003)

表 6-1 IQ による知能水準の分類

	DSM-IV (1994)	Wechsler (1958)	生活のゴール (15歳以上)*
精神発達遅滞	最優~優	120以上	
	中の上	80から119	
	~中の下	70から79	
	境界線	69以下	
	軽度	50-55から およそ70	69以下
中等度	35-40から 50-55		食事, 入浴, 身支度が自立し, 簡単な家庭内の雑用ができる。 簡単な会話ができ, 看板など単純な文章は一部読める。少量の買い物が可能。
重度	20-25から 35-40		食事は自立。入浴には監視を要する。簡単な家庭内の仕事を手伝える。 言葉は認知するが, 看板などを理解して読まない。メモつきで買い物が可能。
最重度	20-25以下		食事はスプーン等を使用するが, こぼしやすい。仕事は困難である。 簡単な言語で自分の経験を話す。経済活動には適応しない。

* : American Association on Mental Retardation (1992) をもとに作成。

『臨床心理アセスメント演習』松原達哉・楡木満生 共編、培風館(2003)